

子ども達の未来が夢と希望に満ちたものでありますように

新しい年を迎え、会員の皆様の健康で、充実した日々を心からお祈り申し上げます。

一般社団法人 全国児童発達支援協議会
(CDS Japan)
会長 加藤正仁

今、地球的規模で何かが起き始めているような気がして、そのことに言い知れぬ心のざわつきを感じるのは私だけだろうか。地震に、嵐に、竜巻に、台風にと、そんな天災に輪をかけるように人智の機能不全からくる悲劇的な事件・事象も残念ながら後を絶たない。

もう少し広く、地球的規模で俯瞰するなら狂信的でエゴイスチックな国家主義がポピュリズムの流れの中で跋扈して来ている。「分裂」と「差別」と「格差」が国を、社会を、市民を、個人を病めている。これまで営々と築いてきた人類の叡智の集積が音を建てて崩壊し始めているのではないかとも思えてくる。

目覚めていよう。間違いなく、病める社会にあってもっとも深刻な被害を被るのは、その中の最も小さな存在であることを歴史が示しているのだから。

我々が mission として掲げる「子どもの健やかな育ちこそが、人類の希望であり未来である」ことを日々の生活の中で具現化する営みが、いつでも、どこでも当たり前のこととして営々と持続することを願いたいものである。

そんな我々の希求を逆なでし、社会を震撼させる事件が今年の7月26日に「神奈川県津久井やまゆり園」で起きたことは、未だ記憶の片隅に残っていてほしいと願うところであるがどうであろうか。とにかく元職員による前代未聞の確信犯の事件である。この信じられない大量殺傷事件の背後に横たわる問題性に対する責任が我々関係者にないのだろうか。支援関係者として被災された方々との共生を掲げ、その啓蒙啓発に、実践に人生の多くを費やしてきた者として。また、この事件の総括なしに、まるで何もなかったかのように平然とこれからを生きていくことが許されるのだろうか。

「人権」、「尊厳」、「平等」、「自由」、「自立」、「共生」などなど、我が国には曲がりなりにも日常の中にしっかり根付いてきていると思います、自らの生き様の成果として誇れる気持ちでいたけれど、結局はほとんど根の浅いものでしかなかったのだ。未だそれらのすべてが見せかけの表層レベルで、とんでもない偏見や誤解や差別に満ちた異質なレベルにとどまっていることに気づかされたのである。

調子に乗るな！、いい気になるな！ 社会変革はそんなに生易しいことじゃないぞ！と。

今は只々頭を垂れて謙虚に、そしてしなやかに、したたかに再挑戦を期そう！！



CDS Japan

事務局 11-8380141

福岡県小郡市小郡74番8-103



一般社団法人

全国児童発達支援協議会

発支協

第4号

2017.02.15

【事務局】

Tel 080-1765-0172

Fax 0942-72-5211

E-Mail

office@cdsjapan.jp



発支協 報告

全国児童発達支援協議会主催、第6回全国職員研修会が、平成28年07月14～15日に、長崎県佐世保市アルス力佐世保館において当地事務局の「さんりんしゃ」を中心に開催されました。

第7回「全国職員研修会」報告

全国大会を終えて

CDSの会員みなさん、第7回全国児童発達支援協議会全国職員研修会（長崎大会）では、大変お世話になりました。

「長崎はCDSの会員が少ないから研修会を通じて仲間を増やそう」という軽い気持ちでお引き受けし、何もわからないままでの準備の始まりでした。テーマを、長崎が抱える課題を克服する願いを込め「おこそう！発達支援のうねりを」と設定したものの、大きな研修会開催の運営経験がない中、具体像をイメージすることができず、準備が進まなかったことが反省点です。事務局の皆様やCDS役員の先生方のお力添えがあって行えた研修会であると改めて思います。

当日の運営は、役割毎にその動きをシュミレーションしたものを作成しましたので、県外の役員の方とも連携して運営できました。このような準備と、何より参加者のご協力があったからこそ運営がスムーズにいったと考えております。

さて、研修会には260名の方が参加いただきました。

「厚生労働省障害児支援室」津曲室長の行政説明や、

「国立武蔵野学院」青木院長のお話、

「医療法人萌愁会」神田理事長の人工内耳のお話など

多くの情報に触れることができました。研修会を通して、子どもに関わる様々な立場の人がいるからこそ子どもが育つ環境が整っていることをあらためて感じることができました。

情報交換会では、多くの方々が参加されましたので、交流を深めていただけたことと思います。佐世保バーガーやジャズ喫茶、魚介類や長崎牛を満喫していただき、佐世保の魅力も感じていただけたことをうれしく思います。

会員の皆様本当にありがとうございました。

第7回職員研修会（長崎大会）実行委員長 三輪俊治



勢揃い



加藤正仁会長 三輪俊治実行委員長



津曲室長



分科会共通テーマ発表



分科会

ジャズのタベ



長崎の皆様、大会に関わった九州のすべての皆様、ありがとうございました。

発支協 報告

全国児童発達支援協議会主催、第7回全国職員研修会が、平成28年07月14～15日に、長崎県佐世保市アルカス佐世保において開催されました。

① 記念講演「子どもとその家族、また支援から学ぶ」 国立武蔵野学院（児童自立支援施設）

院長 青木 建 氏

国立武蔵野学院院長青木先生による「子どもとその家族、また支援者から学ぶ」をテーマにした講演を聞き、現代の子どもを取り巻く様々な環境の中で子どもが安心感、信頼感、満足感を持ちながら育つ事の難しさを痛感した。

虐待を受けている子どもがこの30年で4倍以上に増え、平成25年には児童養護施設における措置入所理由の中で虐待が38%と最も高く、入所している児童の約60%が虐待を受けているという。また、入所児童で障がいのある子どもは、3倍以上に増え、入所児童の30%に及ぶと示された。このような社会的養護を必要とする子どもの支援には、子どもの最善の利益のために、社会全体で子どもを育てる環境作りをしていく事が大切である。発達の保障と自立支援を目指し、ライフサイクルを見通した継続的な支援が求められている。

また、これらの子ども達との出会いから学ぶことも多く、支援者は関知する力、言語化する力、伝える力を専門的に養い、結果をすぐに求めるのではなく、焦らず、子どもが楽しいと思える時間を過ごすことが大切であると述べられた。子どもも親も支援者も困らせているのではなく、それぞれの立場で困っている。だからこそお互いの違いを認め合い、子どもにとってどうする事が良いのかを一緒に考えていくと、仲間となり交わり合う関係に発展していく。困っている子どもを放置しないために、出来ない苦手よりも得意な事に着目し、困っている親を追い詰めないために親を認め、褒め、責めない、そして困っている支援者を孤立させないためにチームで実践していく事を重ねていくと共感しあえる関係になり支援が浸透していくように思われる。困らず行動の奥には、困り感があることを理解していると、マニュアルに沿った支援ではなく、人や仲間との繋がりを大事にした支援ができるようになっていくと感じた。子どもの応援団である仲間としてみんなで子どもや家族を支えていこうと思える講演であった。（文責 射場）



② 教育講演「子どもの難聴 その現在と課題」

医療法人 萌愁会 神田 E・N・T 医院 長崎ベルヒアリングセンター
理事長 神田 幸彦 氏

神田先生は長崎において、聴覚障害の子どもへの最先端の医学的支援を長く行ってきました。

神田先生の「子どもの難聴 その現在と課題」は、日本の現在の到達点と言えると思います。児童発達支援を担うセンター事業所では、難聴の子どもたちに出会う場所は、現在限られています。しかし、児童発達支援を担うものとして、難聴について関心をもつこと、難聴の子どもたちはどのようにしているのか、医学や工学技術はどこまでできているのかを知ってもらいたいと企画しました。新生児聴覚スクリーニングから難聴診断、フォローアップにおける医療（補聴器、人工内耳など）、教育面（聴覚活用教育）でのバックアップ体制についてその個々の人工内耳手術と、現在の到達点をしっかりと話してくれました。

きこえと脳という形で、人間がこのような医療や教育を受けとめる仕組みをもっていることもまた紹介されました。人工内耳については、長崎大学の小児314耳、成人137耳、そのうち両耳手術が小児97成人4が含まれていることがデータとして出されました。人工内耳への教育については、聴覚口話法の教育をデータの的に推薦しておりました。

大きな驚きは、手術医師である神田先生が140校もの学校訪問を行っていることです。これはなかなか出来ないことではないでしょうか。教育の中に音楽療法を取り入れていることも大きな驚きでした。人工内耳手術の子どもは、過去音楽に対する苦手が言われてきました。中途失調の成人の人工内耳の歌について、聞こえる時に覚えた歌は歌えるが、新たなメロディはモノトーンになってしまうことが、初期の頃の人工内耳の特徴的な姿として紹介されたことがあります。子どもにおいても同じように言われてきた時期があると思いますが、動画上の人工内耳の子どもが上手になっていく様子が見られ驚きました。このように様々な挑戦（もちろん人工内耳の進歩も含めて）の紹介があったと思います。

神田先生がこの全国児童発達支援協議会に関心を持ってくれたことも成果の一つです。（文責 後藤）



交流会



瑞宝太鼓
知的障がいがかかえて生きてきた人びとが作った和太鼓プロ集団「天上の音色」と評された。



わいわいがやがや
楽しいぞ

研修会 報告

全国児童発達支援協議会主催、第7回全国職員研修会が、平成28年7月14、15日に、長崎県佐世保市アルカス佐世保において開催されました。分科会共通テーマと分科会の状況です。

③ 共通テーマ「地域での育ち、生活を支える」から分科会

第1分科会 重症心身障害・肢体不自由

「重症心身障害・肢体不自由がある児童の育ちと生活を支えとりくみ」

担当理事：米山 明

大会2日目、第一分科会は、6グループに分かれて、上記をテーマに

① 所属施設と自己紹介（地域、事業内容と自分の所属）

② 各施設で困っていること

③ ○○できたら、支援の向上につながる

という前向きな提案・要望 をまとめ、各グループ発表をしていただきました。

討議時間が短かったのですが、まとめとして、米山が「医療的ケア」の最新情報などの話と討議で意見された内容等を整理し、CDSJとして、行政や立法に意見することを宣言し終了致しました。

発表された内容から

① 人材不足（看護師だけでなく、児童指導員も含めて足りない）

② 人員配置：2対1にしてほしい（ケアが大変）

③ 人手不足で、職種間の役割分担・協働が必要。

書類他事務作業に時間がとられ大変

④ 制度の地域差がある Ns 不足かつ、Ns の「医ケア」の知識・理解不足と感
ることがある。

また、提案や要望として、

① 学生研修実習をして「医ケア」「重症児」に慣れるとよいのでは？

② 職員ストレスケアが必要。

③ 制度を実際に活用しやすいものに改革して欲しい。

④ 職種を超えた、業務・技術の理解とそれを習得し、さらに共有が大切である。

（OJT 的に医療的ケア研修ができればよい。危急時は、刑法 37 条 1 項（緊急避難）で違法性の阻却が適応される可能性がある）

⑤ 「医ケア」があると、バス乗車ができない（全国的に厳しい）状況にあり、医ケアできるスタッフ確保（ヘルパー他）など制度改正ができないか？

などの活発な意見が出されました。CDSJ が、今後の制度改正に向けて行政・立法へ働きかける、地域の現状報告や生の情報をいただきありがとうございました。

第一分科会 荒川美鈴氏

第二分科会 天地真顕氏

第三分科会 堀川 ちひろ氏



分科会



分科会



研修会 報告

全国児童発達支援協議会主催、第7回全国職員研修会が、平成28年7月14・15日に、長崎県佐世保市アルカス佐世保において開催されました。分科会共通テーマと分科会の状況です。



③ 共通テーマから分科会

第2分科会 難聴・聴覚障害

共通テーマでは、広島山彦園の天地真頭が、難聴・聴覚障害についての基本的配慮と支援の内容及び実際の支援の様子を紹介し、その後の分科会に受け継がれました。

第2分会は、30名の参加でした。はじめに、実践報告者より以下の追加報告がありました。

- ・聴覚障害児療育の成果と課題について（例えば、人工内耳によって最重度の子どもも聴覚からの音声言語習得が可能になった反面、人との関係性や状況理解の遅れが見過ごされがちであること等）
- ・保護者支援がある意味、子どもへの直接支援以上に肝心な分野であるのだが、現制度の枠組みの中では支援内容に制限や限界があること（収入面において）
- ・幼児期から丁寧な障害受容支援が必要であること

乳児期の直接的間接的支援の一端が補足されました。

続いて、助言者である後藤進先生（秋田オリブ園）から、難聴幼児通園施設設立当時（1970年代）の状況についてお話をうかがいました。当時、厚生省事務次官通達によって開設が進められた難聴幼児通園施設ですが、厚生省から提示された設置基準（設備、機材、人員の条件）は大変厳しく、各自治体の人口状況（聴覚障害児の出生数）も理由となって、全都道府県での開設は実現されなかったとのこと。通園施設がつくられなかった県においては、2歳未満児の教育相談を開始した「ろう学校」が早期支援を引き受けることに。こうして、地方地方で異なる早期教育／療育システムが出来上がったという歴史でした。どのような経緯があって今の療育支援に至っているのかを知ることの重要性を教わったと思います。

その後、参加者の自己紹介の時間が設けられ、それぞれが現在、聴覚障害児／者とどのような接点を持っているかを伝え合いました。

- ・聴覚障害をもつダウン症児の支援の在り方
- ・補聴器・イヤモールド（耳型）のトラブルシューティング
- ・事業所としては経験の少ない「聴覚障害児の療育相談」があったとき、核となる施設／学校はどこか、どう見極めるのか…
- ・言語聴覚士の役割や業務を事業の中にどのように位置づけていけばよいのか…等々。

職場の現状の中で実現可能なサポートは何か、助言が欲しい。これから起こるであろう様々なケースワークのための知見を上げたい。そうした熱意と責任感を持たれた皆さんが本分科会に集いました。

支援の裾野を広げつつ、高い専門性と長い歴史は正しく継承していくこと。

それぞれの機関が担う支援の役割と立場は違えど、最前線の現場同士の連携が重要であること。

（抱え込まず、放り出さず、適切な支援機関へ繋いでいく。）

これからの時代の聴覚障害児支援のイメージが見えてきたように思います。

（文責：天地）

第3分科会 発達障害

分科会3は、発達障害のある子どもの支援に関する分科会だった。

まず全体会で、長崎県が多機能型事業所カミングホームうつつがわの堀川ちひろ先生及び萩田優一先生から「発達障害がある児童の育ちと生活を支える取組み」という題で、小学2年生ADHD男児（服薬中）の放課後等デイサービスでの支援経過について基調報告があった。姿勢保持の難しさ、視覚・聴覚刺激につられやすさ、衝動性の高さ、勝ち負けのこだわりの強さという課題に対して、感覚統合の視点も入れ、見立て（アセスメント）→手立て（発達支援）→評価という手順で、さらには直接的支援と間接的支援に整理され、参加者には実践の参考になったと思われる。支援の結果、事業所内においては活動場面の切り替えや負けの受け入れなど情動調整ができるようになった一方で、家庭や学校場面では般化しにくく新たな発達課題も生じた。より良い支援のためには、事業所内で抱え込んだ支援ではなく、医療や教育を含む関係機関との連携会議の開催や保育所等訪問支援による学校場面での支援など事業所外へのアウトリーチ型支援を強化する必要性を主張された。しかし、連携会議はどこが主体となるべきなのか、訪問支援員の人材確保や事業自体の認知度の低さなどが取り組みの支障になっているという問題提起がなされた。

その投げかけに対して、広島市西部こども療育支援センターの山根先生から発達障害と服薬に関する医学的解説及び連携の重要性と実施についての提案があり、続いて同センターの掛田先生から保育所等訪問支援の実践報告が行われた。その後、具体的な訪問支援の内容や訪問先とのやり取りの方法、人材の確保などについてフロアを交え活発にやりとりが行われた。まだまだ全国的にみても保育所等訪問支援を実施している事業所は少ないものの、同事業への関心の高さがうかがわれた。

これを機に全国で具体的な実践が広まることを期待する。

（文責 光真坊）

研修会 報告

④ 講演 「『発達支援』の立場から読み解く障害児通所支援の理念と方向性」

姫路聖マリア病院 宮田広善氏

まず、「障害とは何か」「発達支援の目標は何か」「地域が変わるとは何か」などについて、さまざまな歴史的事実や著作、映画などを例にして話が展開した。

次に、「子ども子育て支援制度と障害児施策の関係性」「早期発見・早期療育システムの反省」「厚生労働省が開催した『2つの検討会』が示した発達支援の方向性」などに触れながら、インクルージョン時代における生活モデルの発達支援の方向性が示された。今後の通所支援に求められる機能は「障害種別に枠組みされない支援」「乳幼児期から成人期に続く一貫した支援」「施設が培った専門性の地域への提供」などであるが、それぞれ児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援の中に組み込まれていることが説明された。



講演の中盤では障害児通所支援の3事業と障害児相談支援事業の成立の背景や目的について具体的に説明があった。

児童発達支援は、「障害」を冠さぬ初めての事業であり、障害の確定する前の「気になる」時期から利用できる。障害種別ごとの専門性を提供する医学モデルの療育では自立できる子どもが育たなかったという反省から、保育を基盤としてすべての障害のある子どもを支援し、障害個別の課題には医療的専門性を取り入れた児童発達支援計画の実施で対応する。

保育所等訪問支援は、初めての個別給付による訪問型事業である。児童発達支援事業で活動イメージを得た子どもが保育所等の刺激の多い場所でもそれを発揮できるようにアフターケアや、増加傾向にある多くの「気になる子」の地域支援が期待されている。地域での育ちを重視する発達支援を考える時、最重要の事業とも言える事業である。

放課後等デイサービスは、厚労省障害部局が実施する初めての放課後支援の事業である。これまで福祉的支援が途切れがちだった学齢期の、加えて子どもが成人期に向けて生活技術を獲得する放課後という重要な時間帯に障害福祉が関与する点が重要である。急激な増加により質の担保が課題となっているが、これは放課後等デイだけの問題ではなく、職員配置基準などにかかわる国、利用計画を作成する相談支援事業所、支給決定する市町村行政、そして利用する保護者など関係する機関すべての問題であり、利用契約制度の未熟性の課題であると説明された。

障害児相談支援は、インクルージョン時代の障害児支援の基盤であり、地域での育ちへの継続した支援にとって非常に重要な事業である。また、ライフステージを通じた縦の連携と地域ネットワークによる横の連携の要となる事業でもある。

最後に、発達支援の課題は「子ども」「親・家族」「地域」のエンパワメントであり、相談支援の課題は「ライフステージ」と「地域」のつながりである。その目標は、障害のある子ども達の成人期の豊かな人生と障害のある・なしにかかわらず安心して過ごせる地域であるというまとめで終了した。



全国児童発達支援協議会主催、第7回全国職員研修会が、平成29年02月24日（水）に、長崎県佐世保市アルカス佐世保において開催されました。2日目講演の状況です。



宮田 広善
遅塚 昭彦

平成 28 年度 北海道ブロック研修会報告

発支協 報告

全国児童発達支援協議会 北海道ブロック研修会

北海道ブロックでは、春と秋に研修会を開催致しました。春は基礎に立ち戻り、子どもにとって楽しい「あそび」の中に発達の原動力があるとして作業療法の観点からさまざまな身体状況のこどもたちへの支援について講座をしました。また、現在ニーズの高い、肢体不自由児（医ケアや重心児）の療育支援についても学びの場となるよう企画し、現在、肢体不自由のあるお子さんの支援をしている事業所をはじめとして、これから関わっていききたい、受け入れしていきたいと考えている事業所等から 120 名もの参加者があり、グループワークでは活発な意見交換がされました。

秋の研修では、青山学院大学の古荘純一氏から、障害のある子どもの子育てについて、心の育ちの理解とその支援の大切さ、保護者支援には「傾聴」と「共有」がキーワードであること、虐待が及ぼす脳への影響、早期療育の遺伝子への影響など多岐に渡り講演して頂きました。

分科会では、北海道ブロックの特徴でもある実践レポートを中心に、「知的・発達障害」と「肢体不自由・重心」の 2 グループに分け、子ども達と家族への支援について発表して頂きました。最後に、CDS-Japan 加藤会長より、障害児支援に係る最近の情勢について、そして CDS-Japan のミッションと今後の方向性について語って頂きました。厚生労働省の大西室長補佐（当時）からは最近の施策についてお話して頂きました。全道各地から、参加して頂き、良い学びの機会になりました。

●春のセミナー

テーマ：あそびで伸ばそうこどもの力 ～ こどもの心が動くとき、こどもの身体が動くとき

日時：平成 28 年 7 月 16 日（土）13:00 ～ 16:00

会場：札幌市教育文化会館（札幌市中央区北 1 条西 1 3 丁目）

後援：北海道、札幌市 共催：札幌市自立支援協議会子ども部会

講座 1 こどものからだの発達 基礎知識 健常児の発達から学ぶ

講師：金田 実 先生（榆の会こどもクリニック作業療法士）

講座 2 こどもの発達の可能性を見つける くらしの中で工夫できること：

講師：谷藤 弘知 先生（江別市発達支援センター長）

グループワーク：A) 重心児・医療的ケアのある児 B) 肢体不自由がある児 C) 運動が苦手・

じっとしてられない児（てんかんや脳性まひなど）

●秋のセミナー

テーマ：「障害のある子どもの心の育ちと発達支援及び家族支援」

日時：平成 28 年 10 月 23 日（日）10:00 ～ 16:00

会場：札幌市教育文化会館（札幌市中央区北 1 条西 1 3 丁目）

後援：北海道、札幌市

講演『障害のある子どもの子育て支援と家族支援』 青山学院大学 古荘純一 氏

分科会（実践発表・交流－2 会場）

（1）知的障害・発達障害のある子どもの支援・家族支援

①旭川子ども発達支援センターたいよう ②放課後等デイ知恵のわ

（2）肢体不自由・重症心身障害のある子どもの支援・家族支援

①児童デイサービスむぎのこ

②榆の会 きらめきの里

説明・提言「障害児支援施策の動向」

全国児童発達支援協議会会長 加藤正仁 氏

厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 障害児・発達障害者支援室

室長補佐 大西延英 氏

・事務局会議を 5 回開催しました。

発達に心配のある子ども達の幸せのために、手をつないで頑張ります。



平成 28 年度 関東ブロック活動報告

文責：関東ブロック事務局 酒井康年

◎ 関東ブロック第 6 回研修会 実施報告

今年度は関東ブロック内の各地域に会場を移して開催したいと考えて準備を進めてきました。これまでは東京を会場にして開催を行ってきましたが、交通の便が良いとは言え、やはり遠方で参加できない方がいること、CDS の存在を広く多くの方に知っていただくことから企画したことです。また、この研修を機会にそれぞれの地域でネットワーク作りが広がったり、相互の情報交換ができたこと、今後の発達支援の盛り上がりにつながることも願いとしてこめました。3 地域合計で 400 名近い方が参加してくださいました。今後も、ブロックならではの活動を企画していきたいと思ひます！

・講師と参加申し込み者数 ：合計 107 名（加盟：95 名 非加盟：12 名）

	北関東地区	飯田地区	いすみ地区
会場	群馬県高崎市	長野県飯田市	千葉県いすみ市
日程	2016 年 10 月 1 日	2016 年 11 月 6 日	2016 年 11 月 23 日
テーマ	児童発達支援の現状と方向性と支援の実態	発達に気になる子の理解と対応	発達支援・・・地域で手をつなぎ、どの子もいきいきと
情報提供	【情報提供】児童発達支援の現状と方向性		
	CDS 理事、光真坊浩史	CDS 副会長、米山明	関東ブロック事務局、酒井康年
プログラム	【講演会】		
	将来を見据えて、～児童期から青年期の支援をつなぐ～	発達に気になる子の理解と対応～作業療法の視点から～	発達支援と小児科医療、
	NPO 法人リンケージ、 、、、、、、、、石川京子	うめだ・あけぼの学園、 、、、、、、、、酒井康年	外房こどもクリニック、 、、、、、、、、黒木春郎、
	【実践報告】		学校現場における、 、、、、発達支援と地域連携、
	障害者相談支援センター、 、、、、希望の家、米田真一 利根沼田子ども発達支援センターリズム、 、、、、、、仲丸守彦		茂原市立中島小学校長、片岡学、 発達支援の中心である、 、、、、療育の機会増大を、 こども未来共生会理事長、 、、、、、、中島展、 ワークショップ、
合計	【参加者】		
	76 名	110 名	207 名
県内、加盟	36 名	7 名	4 名
県内非加盟	34 名	103 名	203 名
県外、加盟	4 名	0 名	0 名
県外非加盟	2 名	0 名	0 名

群馬会場



千葉会場

発支協 報告

全国児童発達支援協議会 ブロック研修会報告
関東ブロック活動報告



広大な関東平野

平成 28 年度 中四国・九州ブロック職員研修会

（第 24 回 中四国・九州ブロック職員研修会）

平成 28 年度 中四国地区職員研修会

○担 当：社会福祉法人吉敷愛児園 子ども発達支援センター愛

○テーマ：「成人期の自立を見据えた幼児期からの支援について」

○日にち：平成 28 年 10 月 21 日（金）、22 日（土）

○会 場：ホテルニュータナカ（山口市湯田温泉 2-6-24）

○参加者：198 名（68 施設）



中四国・九州ブロックの職員研修会は、中四国と九州の施設が交代で開催しており、平成 28 年度の研修会は「成人期の自立を見据えた幼児期からの支援」をテーマに山口県山口市で開催した。研修会には、各地から 198 名の参加があり活発な研究討議が行われた。

以下、プログラムの概要を報告します。



○施設見学：児童発達支援センター「子ども発達支援センター愛」の見学。保育所との合築施設であり、交流の実施や施設設備、療育等について多くの質問等が出された。

○講演会：「成人期の自立を見据えた幼児期からの支援を考える」をテーマとして、

広島市西部こども療育センター所長 山根希代子氏の進行により、

- ・講演 1 「発達障害医療の立場から」 講師：西川医院発達診療部長 林 隆氏
 - ・講演 2 「児童福祉の立場から」 講師：山口県立大学准教授 横山 順一氏
 - ・講演 3 「発達支援の立場から」 講師：姫路聖マリア病院小児科 宮田 広善氏
- の 3 氏による講演会を開催した。

講演 1 では発達障害の特性とストレングスについて、講演 2 では日本社会の子育てをめぐる状況と家族支援、人材確保について、講演 3 では成人期の自立を見据えた幼児期から支援、重い障害をもつ子の発達支援と自立に向けた支援について、それぞれ熱いメッセージが伝えられた。フロアとのディスカッションも活発に行われた。

○研究発表：2 会場に分かれ 15 演題の発表が行われた。

○ワークショップ：「こどもの心と身体の発達 in Musictherapy」として、子どもの発達における音の意味、音を通じた出会い、コミュニケーション、表現等ワークショップが行われた。

開会式

次年度は、平成 29 年 11 月 10～11 日
大分県別府市で開催される予定である。

子ども発達支援センター 愛 施設長 岡本実



発支協
報告

全国児童発達支援協議会
中四国・九州ブロック職員研修会
ブロック研修会報告

平成 28 年 10 月 21 日、
14 時 10 分まさにこの
研修会当日に、
鳥取県中部を震源と
するマグニチュード
6.6 の地震が発生しま
した。死者が出ては
いないとはいっても、
地層活動の活発化に
今後とも注意を願
致します。
深くお見舞い申し上
げます。

鳥取中部地震お見舞い

全国児童発達支援協議会

一般社団法人 全国児童発達支援協議会

第8全国施設管理者等研修会

第8回全国施設管理者研修会

テーマ:「制度としての発達支援と現場における発達支援」後援:厚生労働省 文部科学省

日 時:平成29年2月24日(金)～25日(土)

会 場:横浜市 (はまぎんホール ヴィアマーレ)

プログラム

【2月24日(金)】

12:00～受付開始

12:30～開会式

12:45～15:15 行政説明 厚生労働省、文部科学省

15:30～17:00 講 演

「共生社会と発達支援 ～津久井やまゆり園事件と出生前診断から見えること～」

公益財団法人日本ダウン症協会代表理事 玉井 邦夫氏

17:00～17:30 CDS 理事会からの報告

- ・平成28年度CDS加盟施設の実態調査結果について
- ・平成28年11月から始まった「児童発達支援ガイドライン策定検討会」について
- ・平成28年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業

「保育所等訪問支援の効果的な実施に関する調査研究」について

(18:30～情報交換会)

【2月25日(土)】

9:00～10:30 講 演

「行政からみた発達支援への想い」(仮)

元厚生労働省障害福祉部長 藤井 康弘氏

(30分 休憩)(質問用紙による質問・意見収集)

11:00～12:15 討論・対談・意見交換

藤井氏のお話を受けてフロアからの意見・質問等

質問・ご意見を受け継続鼎談 藤井 康弘氏

宮田 広善氏 (当協議会 理事:政策担当)

光真坊 浩史氏 (当協議会 理事:政策担当)

司会 北川 聡子氏 (当協議会 副会長:政策担当)

(12:15～13:30 昼 食)

13:30～15:00 講 演

「家族・子どもの抱える困難さの現状一家族支援に求められるもの」

原宿カウンセリングセンター 所長 信田 さよ子氏

15:00～15:15 閉会式

玉井 邦夫氏



大正大学
臨床心理学科教授
「あまり知られていない
ダウン症のはなし」
「子どもの虐待を考える」
他著書多数

藤井 康弘氏



元厚生労働省
障害保健福祉部長
長年厚労官僚として、社会
福祉畑で活躍し、児童福祉
障害福祉領域にエネルギー
を注いできた。

信田 さよ子氏



臨床心理士
依存症、DV、児童虐待
などに取り組んできた。
「家族の悩みにおこたえ
しましょう」他著書多数

研修会案内

全国児童発達支援協議会主催、第8回全国施設管理者等研修会が、平成29年02月24日(金)～25日(土)に、横浜市はまぎんホール・ヴィアマーレにおいて開催されます。



一般社団法人 全国児童発達支援協議会

定時社員総会 報告

（事業年度：平成 27 年 10 月 1 日～平成 28 年 9 月 30 日）

1. 総会の種類 定時社員総会
2. 招集年月日 平成 28 年 11 月 18 日（金曜日） 午後 2 時から
3. 開催場所 広島県広島市東区二葉の里三丁目 2 番 3 号
 広島県医師会館 302 会議室
4. 加盟総数 463 施設
5. 議長の氏名 加藤正仁
6. 定数確認 総会参加会員施設数 49 施設
 委任状提出正会員数 228 施設うち、有効数 228 施設
 よって、総会は成立

7. 審議事項

- ① 当期事業報告は承認された。
事務局が資料に基づき説明を行った。
- ② 会計決算及び監査報告は承認された。
事務局が資料に基づき説明し、その後加藤監事より監査報告がなされた。
- ③ 今期事業計画案及び予算は承認された。
事務局が資料に基づき説明する。

8. 報告事項

- ① 平成 28 年度 厚生労働省 障害者総合福祉推進事業
採択と実施について光真坊理事が資料に基づき報告した。
- ② 障害者政策委員会の委員委嘱について
加藤会長が資料に基づき報告した。
- ③ 児童発達支援に関するガイドラインの策定委員会の構成員について
山根理事が資料に基づき報告した。
- ④ CDSJ 震災義援金の使途に関する報告
事務局が資料に基づき義援金額を報告し、協力いただいた方々へ謝辞を述べた。
熊本の震災後の義援金については、震災直後の物資の送付に活用され、その後保留となっている点を報告した。
今後、熊本県庁所管課等と連絡を取り、被災した障害児通所支援施設・事業所へ配分することを報告した。

以上

発支協 報告

一般社団法人 全国児童発達支援協議会
平成 27 年度 定時社員総会 報告

発支協 広報

全国児童発達支援協議会

ホームページの開設
素敵なリーフレットの作成

【全国児童発達支援協議会のホームページ開設】

ホームページをリニューアルしました。最新情報を掲載していますのでご活用下さい。会員専用ページのIDとパスワードは、郵送にてご案内が完了しております。

<http://www.cdsjapan.jp/>



【リーフレットの作成】



編集後記（G）

全国児童発達支援協議会に加盟の皆様、またこれから加盟していくとされている皆様、あけて

おめでとう

ございます。

「発支協第4号」ができました。振り返ってみますと、平成28年度は、私たちの思いを打ち砕くような出来事がありました。

津久井やまゆり園の事件です。いまだ、人間は差別から逃れられずにいること、しかしなお、差別なき未来をめざすべきこと。

第7回職員研修会には、九州佐世保という地域にもかかわらず、多くの方の参加がありました。全国の皆様の熱意と使命感に心打たれました。

こうした方々と共に子どもたちへの支援を通じて、社会そのものへの支援を考えていくことが求められているのだと強く感じさせられました。

厚生労働省障害福祉課の専門官から障害児・発達障害者支援室室長補佐を努められた大西延英氏が、十二月二十八日付で退職をされました。後任には専門官であった小島裕司氏が室長補佐になりました。

大西延英さんいろいろなありがとうございました。感謝しております。

